「鉄槍行」――『韋軒遺稿』を読む（二）

中西達治

鉄槍行贈上田某并序

（原文には、一・二点、レ点はない。今試みに私見を付した。）

余以二己巳之七月一囚二于高須藩一。槍師上田某来問二我戊辰戦略一。又論二槍隊用舎得失一。談極快。因作二長句一以贈レ之。

多君鉄槍雄二一方一。　因敵用之説何詳。
新砲機巧無レ物レ比。　時論或将レ廃二刀槍一。
君不レ聞　縦横衝突制二呉蜀一。
阿瞞多智一槊足。　南征無レ前名声芬。
又不レ聞　彪死留レ皮推二気節一。
胡髯黒稍于将軍。　即今誰能廻二頽波一。
又不レ聞　随レ時取舎果如何。
王鉄槍兮一世傑。　且取二近事一論二精確一。
求二友海外一人已多。　赤谷関門当二咽喉一。
物換星移今非レ昔。　不レ暇レ発レ弾接二槍矛一。
又不レ聞　長芸左次柴田里。
我細戈千足国。　憤激魚貫逞二其技一。
元亀天正武愈隆。　戊辰之秋。乱既平。余訪二長州奥平謙甫於越後各次一。謙甫曰赤谷
又伝信中槍弾正。　戦甚烈。初以二柴田安芸一藩一為二先鋒一。我藩次レ之。将レ襲二赤谷一。
誰言槍砲元難レ較。　時貴藩先鋒已至。二藩兵不レ肯レ進。我兵乃超進与二貴藩一戦。槍刀
相接。銃臀相打。雖二殺傷相当一。終無レ利。収レ兵帰二柴田一。
座有二高須梅三郎者一。亦長人。曰貴藩善二用槍隊一。曩我藩兵攻二
若松城一。槍手突出。鋒鋭甚。我兵逡巡。余属隊士曰。安藤市蔵
等技倆吾能知レ之。何足レ畏。然終不レ肯レ進也。蓋昔年長人学二槍
於我藩志賀小太郎一。故梅三郎与二市蔵等一共研二其技一。市蔵後為二
槍師一。
更有二佳人致二孤忠一。　夙学二薙刀一代二女工一。
其技精妙其顔麗。　敵愾不レ独木蘭雄。
進二撃縦横一遂戦歿。　圧倒当年巴女功。
佳人名阿竹。藩士中野平内女。幼学二薙刀於藩士赤岡大助一。同門
婦女数十人。竹女尤善レ之。国難時。竹女与二依田氏婦等一結レ隊進
撃。人莫レ不レ壮レ之。

要レ之槍手之用在二其人与レ時投機一。
用舎君須レ与二時宜一。
吁
砲可レ用槍不レ可レ廃。　運用存レ心是我師。

【読み下し】

鉄槍行　上田某に贈る　并びに序

余、己巳の七月を以つて高須藩に囚となる。槍師上田某来たりて我に戊辰の戦略を問ひ、又槍隊の用舎得失を論ず。談極はめて快し。因りて長句を作り以つて之に贈る。

多君の鉄槍、一方の雄なり。
敵に因りて之を用ふるに、説何ぞ詳かならん。
新砲機巧、比ぶるに物無し。
時論、或はまさに刀槍を廃せんとす。
君聞かずや、
阿瞞多智、一槊足。縦横衝突、呉蜀を制す。
又聞かずや、
胡髯黒稍の于将軍。南征前無く、名声芬たり。
又聞かずや、
王鉄槍、一世の傑。彪は死して皮を留むるの気節を推す。
友を海外に求むるに、人已に多し。即ち今誰か能く頽波を廻せん。
物換り星移り、今は昔に非ず。時に随ひ取舎果たして如何。
又聞かずや、
我が細戈千足国。驍勇の先従、天性の得。

二

元亀天正、武いよいよ隆んなり。賤岳の七槍は、大東に冠たり。
又伝ふ、信中の槍弾正。中書の蜓槍、余風を継ぐ。
誰か言ふ、槍砲元較べ難しと。胡服騎射、論已に卓せり。
紙上の空談未だ必ずしも然らず。且く近事を取りて、精確に論ぜん。
維れ歳戊辰八月の秋。赤谷の関門は当に咽喉たるべし。
敵のまさに襲はんとする時、我れ正に到る。弾を発する暇あらず、槍矛接す。
壮士の一隊皆敢死す。長芸左次す、柴田の里。
槍手又重囲の中を出で、憤激魚貫其の技を逞しうす。

戊辰の秋。乱既に平ぐ。余、長州の奥平謙甫を越後の各次に訪ふ。謙甫曰はく、赤谷の戦甚だ烈し。初め柴田安芸二藩を以つて先鋒と為す。我が藩之に次ぐ。将に赤谷を襲はんとす。時に貴藩の先鋒已に至る。二藩の兵進むを肯はず。我が兵乃ち超え進みて貴藩と戦ふ。槍刀相接し。銃臀相打つ。殺傷相当すと雖ども、終に利無し。兵を収めて柴田に帰ると。
座に高須梅三郎なる者有り。亦長人なり。曰はく、貴藩は槍隊を善用せり。曩に我藩兵、若松城を攻むるに槍手突出す。鋒鋭甚だし。我が兵逡巡せり。余、属する隊士に曰はく。安藤市蔵等の、技倆、吾能く之を知る。何ぞ畏るるに足らん。然れどもつひに進むを肯はざるなりと。けだし昔年、長人槍を我が藩志賀小太郎に学ぶ。故に梅三郎は市蔵等と共に其技を研す。市蔵は後に槍師為り。
更に佳人の孤忠を致す有り。夙に薙刀を学び、女工に代ふ。
其の技は精妙にして、其の顔は麗し。敵愾独りならず、木蘭の雄。
縦横に進撃し、つひに戦に歿す。圧倒す、当年巴女の功。
佳人、名は阿竹。藩士中野平内の女なり。幼にして薙刀を藩士赤岡大助に学ぶ。同門の婦女数十人。竹女もつとも之を善くす。国難の時、

竹女は依田氏の婦等とともに隊を結びて進撃す。人、之を壮とせざる莫し。
之を要するに、槍手の用は、其の人の、時と投ずるの機とに在り。
用舎は君、すべからく時宜とともにすべし。
ああ、
砲は用ふべし、槍は廃すべからず。運用は心に存り。是、我が師なり。

【語釈】

行　「行」は、漢詩における古詩の一体。後世、比較的長編の叙事詩に用いられるようになった。

余　この詩の作者、秋月悌次郎。

己巳の七月　明治二年七月（旧暦）。悌次郎は、会津戊辰戦争の責任者の一人として、この年、美濃高須藩に永のお預けとなり、手代木直右衛門と共に高須（現在の岐阜県海津市内）に来ていた。

槍師上田某　高須藩の槍術指南役、上田結城。実名氏貞。文政十二年生まれ。『高藩紀事』明治四年七月の条に、松平義生が上京の際、「諸芸術御指南」の輩と別れの宴を催したとあり、その中に彼の名がある。

戊辰の戦略　会津戊辰戦争の際の会津若松藩の戦略。

用捨得失　用いるか捨てるか、その利点と欠点。

阿瞞多智一槊足　阿瞞（あまん）は、曹操の幼名。曹操（一五五～二二〇）は、中国後漢末の武将、政治家。三国時代の魏の基礎を作り、呉の孫権、蜀の劉備と並び称された。「槊」は、ほこ（音は、サク）。長さ一丈八尺の大きなほこ。多才を誇る曹操が、武芸にすぐれ、槊を携えて戦場を疾駆したこと。

胡髯黒稍の于將軍　あごひげを蓄え大きな鉾を持った于将軍。「胡髯」は、あごひげ。「稍」は、ほこ（音は、サク、槊と同字）。長さ一丈八尺の大きなほこ。「于」は、中国、後漢末から三国時代の魏の武将、于禁（二二一年没か）。曹操幕下の猛将。

王鉄槍　王彦章（八六三～九二三）のこと。王彦章は、唐を倒した後梁の武将。大槍を手にして馬を疾駆させ、王鉄槍と恐れられた。九二三年、後唐の荘宗（李存勗）と戦って捕らえられ、降伏をすすめられるが、「虎は死して革を残し、人は死して名を残す」といい、従容として死についたという。

我が細戈千足国　「我が細戈」は、本朝の武士の用いる槍。中国の武人の持つほこの巨大さに比していったもの。「千足国」は、「一槊足」の対語であるが、文意不明。

元亀天正　「元亀」は、正親町天皇の時代の年号（一五七〇～七三）。「天正」は、正親町天皇、後陽成天皇時代の年号（一五七三～九二）。戦国時代の最末期、織田信長、豊臣秀吉の天下統一が完成した時代。武将の活躍が最も華やかだった。

賤岳の七槍　天正十年（一五八二）の本能寺の変の翌年、織田信長の後継を巡って羽柴秀吉と柴田勝家とが賤ヶ岳（滋賀県長浜市）付近で戦い、秀吉が勝利を収めた。その際、秀吉方で功名をあげ、後世賤ヶ岳の七本槍と呼ばれた武士達のこと。福島正則（一五六一～一六二四）、加藤清正一五六二～一六一一）、加藤嘉明（一五六三～一六三一）、脇坂安治（一五五四～一六二六）、平野長泰（一五五九～一六二八）、糟屋武則（一五六二～一六〇七）、片桐且元（一五五六～一六一五）。

大束　東の果て、すなわち日本のこと。

信中の槍弾正　保科正俊（一五〇九～一五九三）のこと。保科正俊は、戦国時代の武将。信濃国高遠城を領していた国人であったが、武田信玄家臣となり、信濃先方衆の一人として活躍し、特に槍に優れた使い手であったため、戦国の三弾正に数えられ、高坂昌信の「逃げ弾正」、真田幸隆の「攻め弾正」に対して「槍弾正」と称された。一五八二年、

武田氏が滅亡した後は徳川家康に仕えた。正俊の孫正光の後を継いだ正之は、二代将軍秀忠の庶子で、会津松平家の祖である。

中書の蜓槍余風を継ぐ　「中書」は、中書省のこと。またその任に当たる人。中務。天皇の側近として詔勅、その他の文書に関わる。ここでは、松平容保が、京都守護職として孝明天皇の信任あつく、参議に任じられたことを踏まえるか。「蜓」は、イモリ。イモリの角のような槍。戦争に負けた会津若松藩の槍隊の謙称。会津若松藩は、遠祖槍弾正の遺風を今に受け継いでいるの意。

胡服騎射　洋装の軍服を着した騎兵の銃撃。維新前の調練の姿。

赤谷の関門　赤谷口は、飯豊山麓にあり、会津若松から新発田に通じる越後街道にある。現在の新潟県阿賀町津川、当時は会津若松藩領。新発田藩と直接接する最重要地点で、白虎隊、玄武隊などが集結、慶応四年八月十五日早朝から激戦が繰り広げられた。

長芸　長州藩と安芸藩。新発田藩と共に会津若松藩を攻撃。『会津戊辰戦史』（会津戊辰戦史編纂会編、昭和七年刊）巻六「越後方面の戦」に、「赤谷口の防守」という章を立て、「赤谷の激戦」以下「川手幸八の殉職」まで、戦いの経過を詳述しており、「赤谷の激戦」中には、この文の奥平謙輔と高須梅三郎の証言の部分が、引用されている。

左次　兵法の用語。山の左側に宿る。

柴田の里　新発田藩領内。

余、長州の奥平謙甫を越後の各次に訪ふ　「各次」は、宿舎。秋月が、戦後猪苗代に謹慎中、河合善順の手引きで、密かに越後の本陣にあった奥平謙輔を訪ねたこと。「北越潜行詩」は、この時の帰途の作。

奥平謙甫　名は居正。号は弘毅斎。（一八四一～一八七六）長州藩士。秋月が藩命によって西国を遊歴した際、萩の明倫館で漢学を講義したことがあり、奥平は、その講義に大感激して以来の交誼であるという。慶応四年の戊辰戦争には、干城隊（谷干城率いる上士から成る部隊）の参謀として北越方面に出征。奇兵隊、報国隊と共に長岡、新発田、新潟を転戦、平定した後、坂下（ばんげ）（会津若松の北西約三里、現在の会津坂下町）で会津藩降伏の報に接した。九月二十四日、猪苗代に謹慎中だった秋月宛に手紙を書き送った。その内容は、お互いに敵対関係になったことを嘆き、会津藩の徳川幕府に対する忠義を讃えたもので、秋月は密かに謙輔を訪ね、藩主父子、会津藩士の将来について思いを述べた。謙輔は秋月の期待に応えるよう努力すると約束し、さらに山川健次郎ら二人の会津少年を書生として預かった。明治元年、越後府権判事参謀という役に就き、民政実務を担当するため佐渡へ向かうが、明治新政府の方針が謙輔の思い描いていたものとは異なっていたとして、明治二年八月、佐渡を離れた。明治九年八月、政府に不満を抱く萩の士族と共に、朋友・前原一誠を首領として「萩の乱」を起こすが敗走。十二月三日、萩の獄にて斬罪に処された。享年三十六歳。獄中、「次秋月胤永檻車中韻」を作り秋月のもとに送り届けている。

高須梅三郎　長州藩士。後、越後府の判事となる。

安藤市蔵　会津藩士。槍の名手で、会津藩槍術指南役。

志賀小太郎　会津藩士。槍の名手。

佳人　美人。

薙刀　江戸時代には、女性のたしなむ武術として知られていた。

女工　ここでは、裁縫など女性のたしなむ技術。

木蘭　古代中国、南北朝時代の北魏で、少女が老齢の父親に替わって男装して出征し激戦を勝ち抜くこと十年、故郷に凱旋してもとの女性に戻ったという物語の主人公。

巴女　『平家物語』に登場する巴御前。平家打倒のため挙兵した木曾義仲に同行し、数々の軍功に輝いたが、その最期を見届けて故郷に戻ったという。

阿竹　中野竹子。（一八四七～一八六八）会津藩士、江戸詰め勘定方、

中野平内の娘。文武両道にすぐれた藩の目付役赤岡大助に学問・武術全般を学び、一時期赤岡家の養女となる。その後さらに、能書家の佐瀬得所に書、黒河内伝五郎に薙刀をそれぞれ学ぶ。松平容保の帰国と共に会津に戻り、八月二十三日早朝、中野家の母こう子、妹優子と共に家を出、本文中に「依田氏の婦等」とあるように、依田まき子、依田菊子、岡村すま子らと合流し、婦女隊（娘子隊とも云う。）として出陣、奮戦の末二十五日早朝、敵弾を受けて戦死した。

【訳】（読解の便宜をはかり、意味のまとまりに分け、小見出しを付した。）

鉄槍行　上田某に贈る　并びに序

【高須藩槍術師、上田某に贈る―この長詩を作った理由】

私は、明治二年七月に、高須藩に幽囚の身となった。その地で槍術指南役を勤める上田なにがしが私の囚居にやってきて、私に会津における戊辰戦争の戦略について問いただし、さらに現代戦における槍隊の用捨得失を論じた。その談義はきわめて楽しかった。そこで長詩を作り、それを彼に贈った。

【現代戦における槍の効用】

君らの用いる鉄槍は、戦場においてはいうまでもなく一方の雄である。敵に対してこれを用いるのに、改めて説を詳しく述べる必要はない。新しい砲による機械の粋を凝らした戦術もくらべようはない。時流に乗った論調では、あるいはまさに刀や槍は時代遅れだとして廃されようとしている。

【曹操・于禁・王彦章―中国における、鉾・槍など、長柄の武器の効用】

君は聞いたことがあるだろう。華麗な才能を有する三国の英雄曹操が大矛を手にして戦場を縦横に駆け巡り、呉の孫権、蜀の劉備を制圧したことを。また、こんな事も聞いたことがあるだろう。あごひげを蓄え大きな鉾を持った于将軍が、南征して敵無く、名声が一気に高まったことを。さらにまたこうも聞いたことがあるだろう。大槍を手にして馬を疾駆させ、王鉄槍と恐れられた一世の英傑王彦章、彼が常々「彪は死して皮を留む」という気概を持っていたと云うことを。

同意見の人を海外に求めると、その数は多くある。誰か、現在の廃れ行く傾向を転回させられるのか。ものは変わり、年は移る、今は昔のままではない。時と共に取捨をすると云うが、果たしてどうしたものだろう。

【賤ヶ岳の七本槍と槍弾正―本朝における槍の功名譚】

君は聞いたことがあるだろう。我が国に伝わる細槍の伝統。これこそ勇ましく強い先例、生得の才能である。元亀天正年間は、武芸がひとしお盛んな時代であった。秀吉旗下の賤ヶ岳の七本槍と呼ばれる武将の事績は、日本歴史上に燦然と輝いている。あるいはまた、言い伝えていることがある。信州の保科正俊は、槍弾正とうたわれている。彼は、我が会津松平家の遠祖で、現在の我が藩の槍術は、イモリの角のごとくにはかないものではあるが、その余風を受け継いでいることは間違いない。

【槍と銃―有効性の結論はまだ出ていない】

誰が断言できるだろうか。槍と鉄砲とは比べがたいと。外国服を着て、馬に乗り銃を撃つ、論は既に卓越している。だが、これは紙上の空談であって、いまだ結論が出ているわけではない。

【戊辰戦争時の事例】

しばらく例を最近の戦いに取って詳しく論証しよう。これまさに慶応四年八月の秋のことである。赤谷の関門は、越後新発田から会津に至るさいの、咽喉に当たる地点である。敵軍が襲撃しようとしたまさ

にその時、我が軍も到着した。銃弾を装填して発射する暇のあらばこそ、槍隊とほこ隊が正面に激突し壮士の一群はみな戦死した。長州、芸州二藩の兵士は、新発田藩内に赤谷を向いて布陣していた。槍隊は重囲を抜け出て、敵陣に激しく迫り、魚を貫くように兵士を串刺しにして技量の冴えを見せた。

【長州藩士の証言①―奥平謙輔の場合】

その年の秋、戦争は終わった。私は、戦い敗れて謹慎していたが、密かに長州軍の奥平謙輔を、越後の官軍の本陣に訪ねた。その時謙輔が言うには、

「赤谷の戦いは、激戦だった。当初、新発田藩、安芸藩の二藩を先鋒とし、長州藩は控えだった。正に赤谷を襲撃しようとした時会津藩の先鋒隊が既に到着していた。そのため、先鋒隊の二藩は進撃しようとしなかった。そこで我が長州藩の兵士が、彼らを押しのけて進み、会津藩兵と戦った。槍と刀が直接ふれあい、銃尾がお互いに問（つか）えるほどの白兵戦となり、死傷者が沢山出たが、結局勝利にはいたらず、新発田の宿営に戻った。」と。

【長州藩士の証言②―高須梅三郎の場合】

その場に、高須梅三郎という人物がいた。彼もまた長州人である。彼が言うには、

「会津藩は、槍隊の用兵が巧みだった。先だって我が藩兵が、若松城を攻撃したが、槍部隊が突出していた。その鋭鋒は激甚で、　長州兵は先に進むことをためらった。私は、自分の部下の隊士達に、『安藤市蔵ら会津藩士の技量については、私はよく知っている。恐れることはない』といったのだが、結局前進しようとはしなかった。」と。

考えてみるに、昔長州人は、槍を我が会津藩の志賀小太郎に学んでいる。つまり高須梅三郎は、安藤市蔵達と技術を磨いたことがあるのだ。安藤市蔵は、後に槍術指南を勤めた。

【中野竹女のこと】

この戦いにおいては、さらに若い女性で、忠義に殉じた人物がいる。幼い時から薙刀を学び、女性のたしなみとして身につけるべき仕事に換えていた。その技術は抜群で、容顔美麗であった。敵愾心は一通りでなく強烈で、中国の伝説に有名な木蘭に匹敵しよう。進撃してついに戦死した。『平家物語』で有名な巴御前の功名を圧倒する現今の女性である。

【竹女とは】

この女性の名は、お竹という。会津藩士中野平内の娘である。幼い時から、薙刀を同藩の赤岡大助に学んだ。同門の女性が数十人いたが、彼女が最も優れていた。会津藩存亡の時、竹女は、依田氏の娘達と共に婦女隊として進撃した。人々は、これを壮挙として称賛した。

【結　論】

要するに、槍隊の運用は、その当事者が直面した時の、運用如何である。用捨については、君よ、時宜によって判断すべきであろう。ああ、鉄砲は用いるべきであるが、かといって槍は廃すべきではない。運用は、その時々の判断による。これが、我がモットーである。

【補　遺】

『韋軒遺稿』中には、「―行」と称する詩が三編ある。そのうち二編が「夢貞行」とこの詩とが高須抑留中に作られており、この詩は、その一つである。今ひとつ、「鷹來行」は、明治十四年の作であるが、この詩の序文に、戊辰の役当時、澤大孺は衝鋒の長、自分は邸監兼幌役として共に越後に出陣し、後に若松城が包囲された時には、共に米沢に赴いたと記している。ここで取り上げられている赤谷口の戦い当時、彼らがどこにいたのかは判然としないが、越後戦線にいたことは確かであり、槍隊の実戦について関わりを持つ当事者ということはで

六

きよう。

　徳川幕府の成立以来、天草の乱を除いて、日本では太平の世が続いた。幕末になって世界の潮流に気づいた幕府以下各藩は、従来の武士団体制の中に、新しく洋式の軍事体制を取り入れた。そして迎えた久方ぶりの実戦、ふだんの訓練が実戦に役立つかどうか、これは武力行為を前提とした戦いの根本命題である。高須藩も、東征軍には尾張藩と共に兵員を派遣していたが、北越の実戦についての情報は乏しかった。そこに、会津籠城戦の中心人物が配流されてきたのである。地元の武術家達にとって、太平の夢を破った実戦の情報は、どうしても聞いておきたい事柄だったに違いない。この高須藩の槍術指南、上田結城にとっても事情は同じである。彼は職業柄、会津攻防戦の際の戦略、さらには実戦における槍の効用に至るまで、秋月に質問したというのである。対する秋月は、軍事奉行添役としてその軍営の中心にいた。ここで彼が語った事柄は、実戦の際の状況ばかりではなかった。単に槍ばかりでなく鉾、薙刀など長柄の武器全般の効用を論じたのである。中国、日本の過去の鉾・槍の事績を説き去り説き来たり、最後を中野竹子の戦死で結んでいる。戦場における戦いの様子など、ふだん余り語られることない情報を物語っているという点で、戦後一年足らずの時期の回想として興味深いが、それと共に、槍という武器に対する考え方を含めて、「鉄槍行」は、秋月の時代認識を知る上でも貴重であると言えよう。

　曹操の故事から始まり、中国における大ほこの実績を述べ、一転して本朝の戦国末期、徳川草創期の槍の実戦記録を記す。彼の博学ぶりが際立つところであるが、その流れを、槍弾正のエピソードをとおして会津藩の槍術の現状に結びつける手法は、見事という他あるまい。

　しかも、そこから会津戦の情報になるのだが、詩中に事実の解説を付し、読み手の理解を助ける。戦闘の現場に彼がいたかどうかと云うことよりは、全体の流れの中での特別な事態の説明ということで、赤谷口の戦いと、中野竹子の奮戦を取り上げる。

　解説がまたよくできている。赤谷口の戦いについて語るのは、敵軍の将二名である。有名な秋月悌次郎の北越潜行という事情がなければ、決して伝わることにないエピソードだと云えよう。さらに、中野竹子の生い立ちと人となりを付す。彼女の戦死の情報は、女性の奮戦記として、それだけで部外者にとっては非常に貴重な情報だったと思われるが、秋月がこの時例に挙げているところを見ると、婦女隊については早い時期から、会津の将兵全体が高く評価していたことが知られる。ただし、中野竹子は、銃撃によって倒れ、近親者に介錯してもらったと云うことだから、ここに挙げるのはどうかと思われる部分がないわけではない。とはいえ、薙刀を手にした出陣姿の雄々しさが目立つことは確かであろう。いずれにしても、この詩を受け取った上田結城にとっては、思いもよらない情報だったはずである。

　こうした展開について『韋軒遺稿』には、友人の川田甕江が、詩文の途中に、

「列二挙本邦故事一、斬新有二精彩一、」

（本邦の故事を列挙す、斬新にして精彩あり、）

と感想を述べている。同じく豊島洞斎は、

「枚二挙槍功実績一歴歴可レ㊈、如二近時日露之戦一、露軍唯有二哥薩克槍兵一、少支二我突撃隊一而已、槍功豈可レ廃、子錫而猶存㊈レ之、必入二諸証件中一、惜哉不レ及レ㊈而歿也、」

（槍の功、実績を枚挙す、歴歴として㊈るべし、近時日露の戦の如き、露軍に唯コサック槍兵あり、少しく我が突撃隊を支ふ、槍の功はあに廃すべけんや、子錫にしてなほ存せば、これを㊈て、必ずや諸証件の中に入れん、惜しきかな、㊈るに及ばずして歿するなり、）

と日露戦争当時のコサック槍騎兵の例を挙げ、子錫（韋軒の雅号）が

七

生きていたらば、これをきっと証明材料の一つとするはずだ、というのである。

さらに南摩羽峯は、

「挙二実事一為レ証、妙、」

（実事を挙げて証と為す、妙なり、）

という。

さらに、娘子軍の項について川田甕江は、

「挿二入娘子軍一、何等妙筆、」

（娘子軍を挿入す、何らの妙筆、）

とその文章展開の見事さを称賛、中村敬宇も、

「雄健痛快、為二刀槍一伸レ冤、為二武夫一吐レ気、今世不レ可レ少之詩、」

（雄健にして痛快、刀槍のために冤を伸ぶ、今の世少なかるべからざるの詩なり、）

と刀や槍が今の時代少し疎んじられているのを跳ね返し、武人のために意気込みを見せており、大きな意味があるといい、さらに結論についても

「一結有レ力、」

（一結力あり、）

という。同じく南摩羽峯も、

「結得精確、」

（結、精確を得、）

と絶賛する。いずれにしても、ごく早い時期の実戦回顧として、注目しておきたい。

（この項、終わり）

二〇一〇・六・三〇

八